

令和3年度
東京学芸大学附属世田谷小学校
オンライン研究会

「学びを自分でデザインする子ども」 を育む新しい 学校カリキュラムの提案

文部科学省 研究開発学校指定
(令和元年度～令和5年度)
* 令和2年度名目指定・延長1年

東京学芸大学附属世田谷小学校
研究部長 久保賢太郎



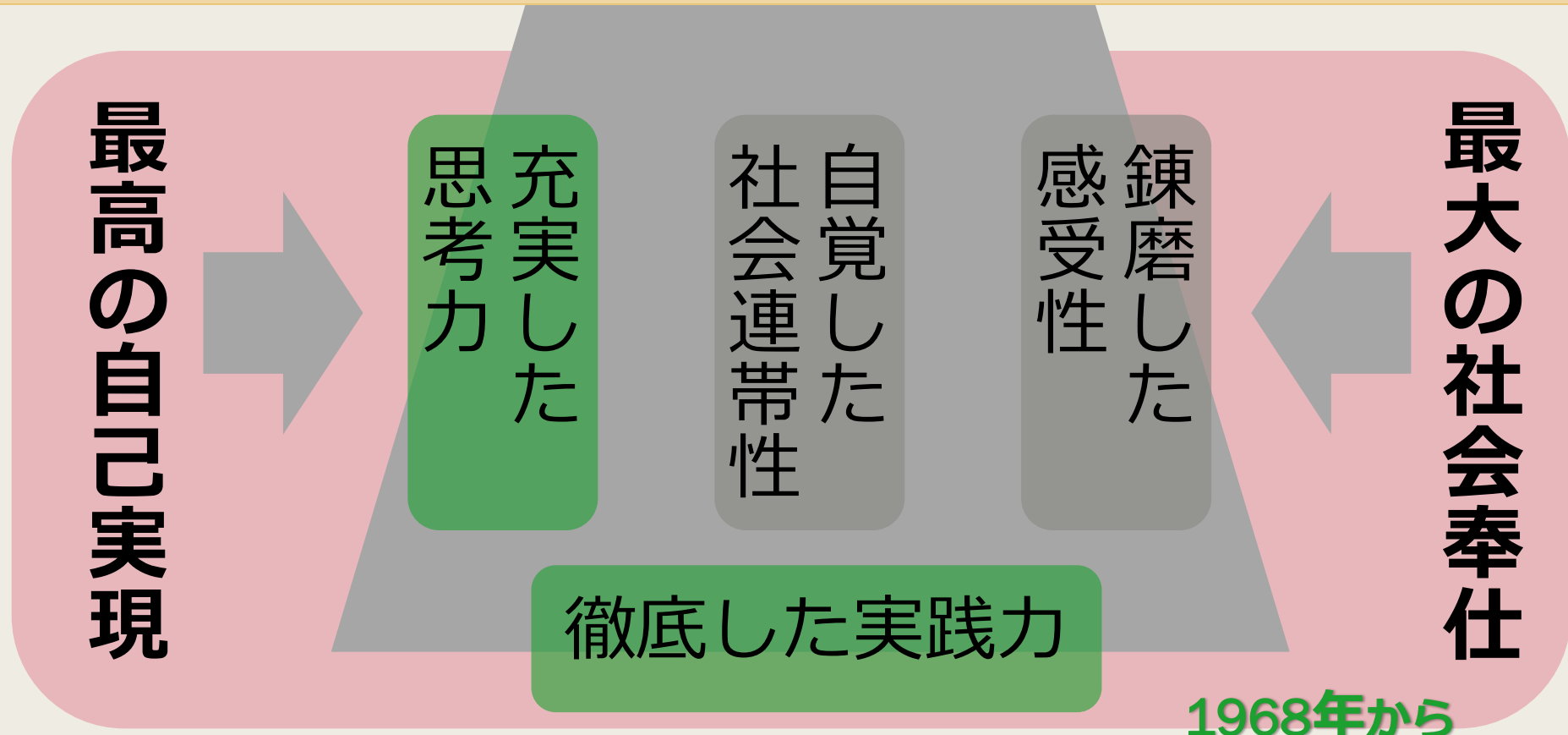
文部科学省 研究開発学校制度

- 新しい教育課程（カリキュラム）や指導方法の開発を目的
- 学習指導要領等の国の基準によらない教育課程の編成・実施が認められている

世田谷小学校が目指してきたこと

学校教育目標

「思いゆたかに 考えふかく とともに生きる子」





子どもととも
につくる
学校の創造

学び続ける
共同体とし
ての学校の
創造

自分の学び
に自信がも
てる子ども

校内研究の成果

- ◆ 「問いの生成と共有化」 ⇒ 学びの切実感
- ◆ 過去・未来までをも含みこんだ 「様相」
- ◆ 絶えず ネクストプラン を生成する授業研究
- ◆ 「本質」 に迫る教科カリキュラム ⇒ 学びの連続性
- ◆ 「個の学びのモデル」

近年の子どもたちの課題

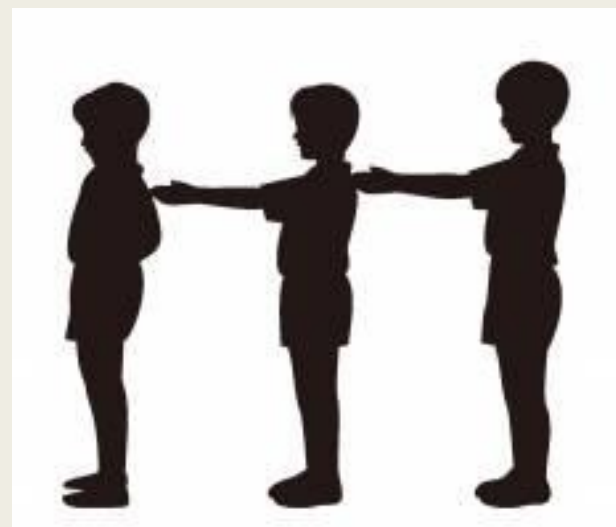
- △ 自信満々に活動を展開している低学年の子どもたちが、学年を進めるにつれて影を潜めてしまったり、活躍の場を避けたりする姿
- △ 学年が進むにつれて何事にも深入りしないように、「こなし」ている姿が増える

我が国の学校教育と課題

- 「〇〇を教える」という発想
- 「みんな同じように動く」ことが理想
- 「わかる」といいことがある
- 「ガンバル」と「いい未来」がある

⇒産業社会の流れの中にある学習観

今の社会は果たして・・・？



我が国の学校教育と課題

- 本来異なる子どもたちを
「ある標準モデル」にあてはめる
 - 同年齢の子どもたちとの
「比較」「序列」「分断」⇒固定化・強化
- 自然と生まれる「優越感」と「劣等感」

求められる 「学び」観の転換

- 行動主義（表面的な行動変容）から
「意味を伴った理解へ」「意味生成」
- 学び手自身の
「求め」「願い」「意志力」が駆動する学びへ
- それらを保障するための「学習環境デザイン」と「テクノロジー」の活用
- 広がりのあるカリキュラムと教師の学習観の転換



その先にある未来へ——
すべての子どもたちに
最適な教育を

“Qubena(キュービナ)”は、人工知能(AI)が子供たち一人ひとりの得意・不得意を分析し、解くべき問題へと誘導する世界初の人工知能型タブレット教材です。

Qubenaの機能

提供サービス

機能説明動画をみる (01:30 min)

求められる「学び」観の転換（山口，2020より）

- 問題解決能力，「正解を出す力」の無価値化
- 求められるのは「問題を発見する力」
→そのために育むべき美意識・感性・直感・ビジョン

- ◆ 「価値創出の源泉」＝「問題解決・モノの製作」から
「問題の発見・意味の創出」へシフト
- ◆ 新しい人材＝ニュータイプに求められる「美意識とアート」

求められる「学び」観の転換

- 10年前の「当たり前」はもはや「当たり前ではない」
- 「個」の意思力、ビジョンにより自己実現ができる時代
- 広がる多様性、「きょうどう」観の変化、求められる「新しい公共」

「問題発見力」「意味を見出す力」「意志力」⇒創造的な「個」の学び
「協働」「多様性の尊重」「新しい公共」⇒協働的な「他者」との学び

これからの学校教育で目指す姿

「じぶんで」

- 「問題発見」「意味を見出す」
「やり抜く力」「創造性」

ビッグアイディア
自分自身をデザインする

- よりよい社会や生き方を自ら模索していこうとする価値観や人間性
- 共に生きる他者と協働する能力や資質
- 深く考え課題を生成し解決に向かう力や意欲

「みんなで」

- 「多様性の尊重」「新しい公共」「共生」「協働性」

目指す姿を 実現するために

- 「習得のパラダイム」
- ある特定の分野・文脈のみで適用可能な知識や考え方
- 「みんなで同じことを同じようにする」
- 「教師によって用意された『やらされごと』の探究」
- 「先生が、何も持っていない子どもに知識を注入する」



**【学校システム・学習環境・教師の学習観】
をこそ問い直す必要性**



「学びを自分でデザインする」カリキュラム
新しい領域設定

デザインの実践の場

Laboratory

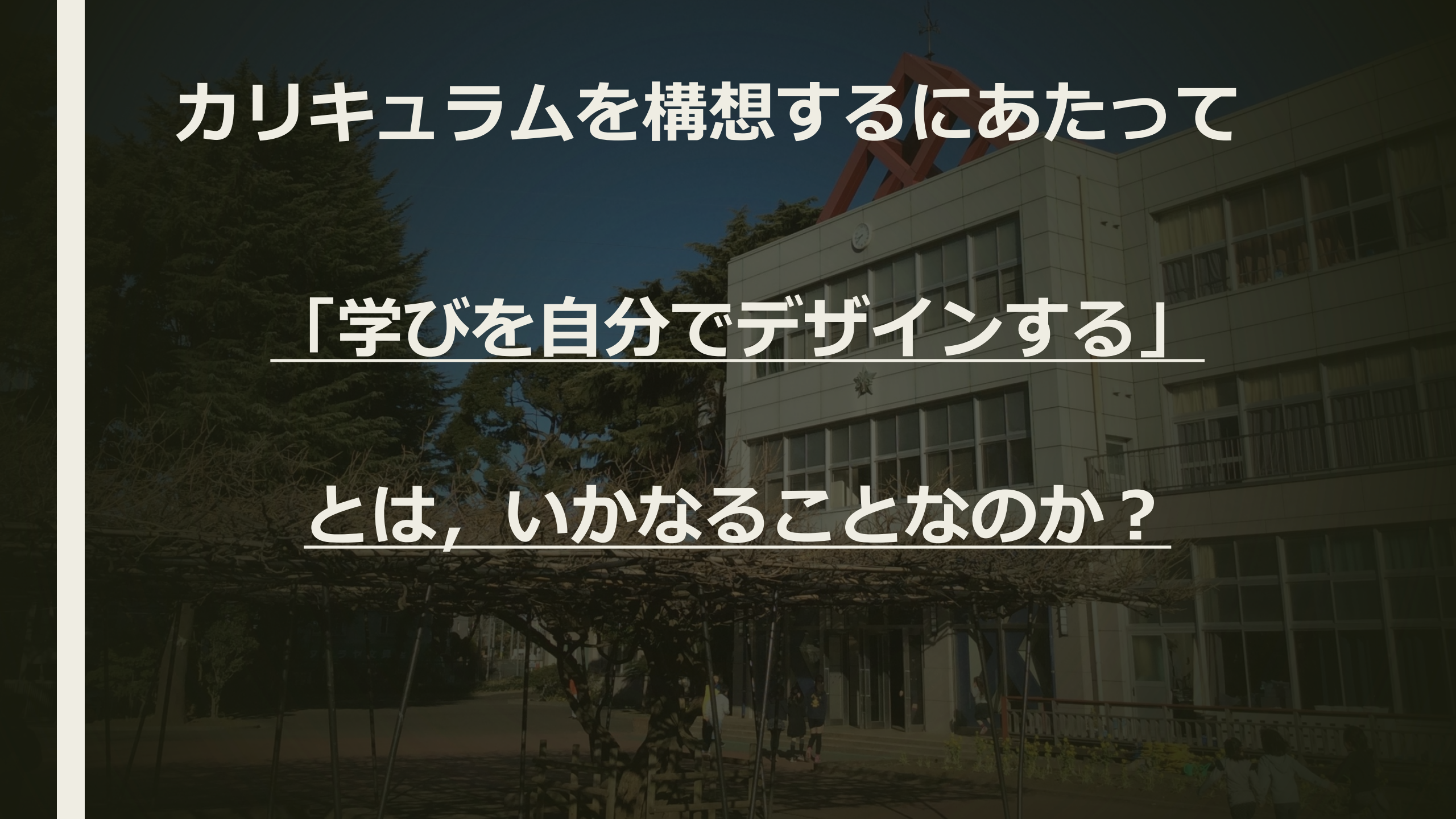
学びの「ビジョン」に迫る道筋を
「自分」でデザイン

Home

「よりよく生きる」ことを
「みんな」でデザイン

Class

デザインの実践に向けて 文化・科学の学問的視座
⇒子どもの経験世界を広げ、「デザイン」につなげる



カリキュラムを構想するにあたって

「学びを自分でデザインする」

とは、いかなることなのか？

学校における「学び」とは何か —「行為」から「参加」へ—

- 「学び」 = 「～ができる」という「行為」ではない
- 「達成できたか」「近づいたか」を評価
⇒学校の「当たり前」は本当に妥当か？
- 「個性」「共生」「多様性」⇒時代のキーワード



教師が「どうなるべきか」「どういう行為をすべきか」を規定し
「そこに向かうことを成長と呼ぶ」こととは親和性がない

学校における「学び」とは何か ー「行為」から「参加」へー

K. R. ソーヤー（2016, 森敏昭訳）

- 教授主義によって「結果的に」もたらされる「**行為の習得**」

⇒教室外で使用するのが困難な表面的な知識

- より深い概念的理解に到達する時

⇒現実世界に転移可能なよう、より使いやすく、また深いやり方で自ら学ぶ

よりよく教えられることで概念的理解に到達するわけではない。
自分自身の学習に能動的に参加することではじめて学ぶのである。

（K. R. ソーヤー, 2016 森敏昭訳）

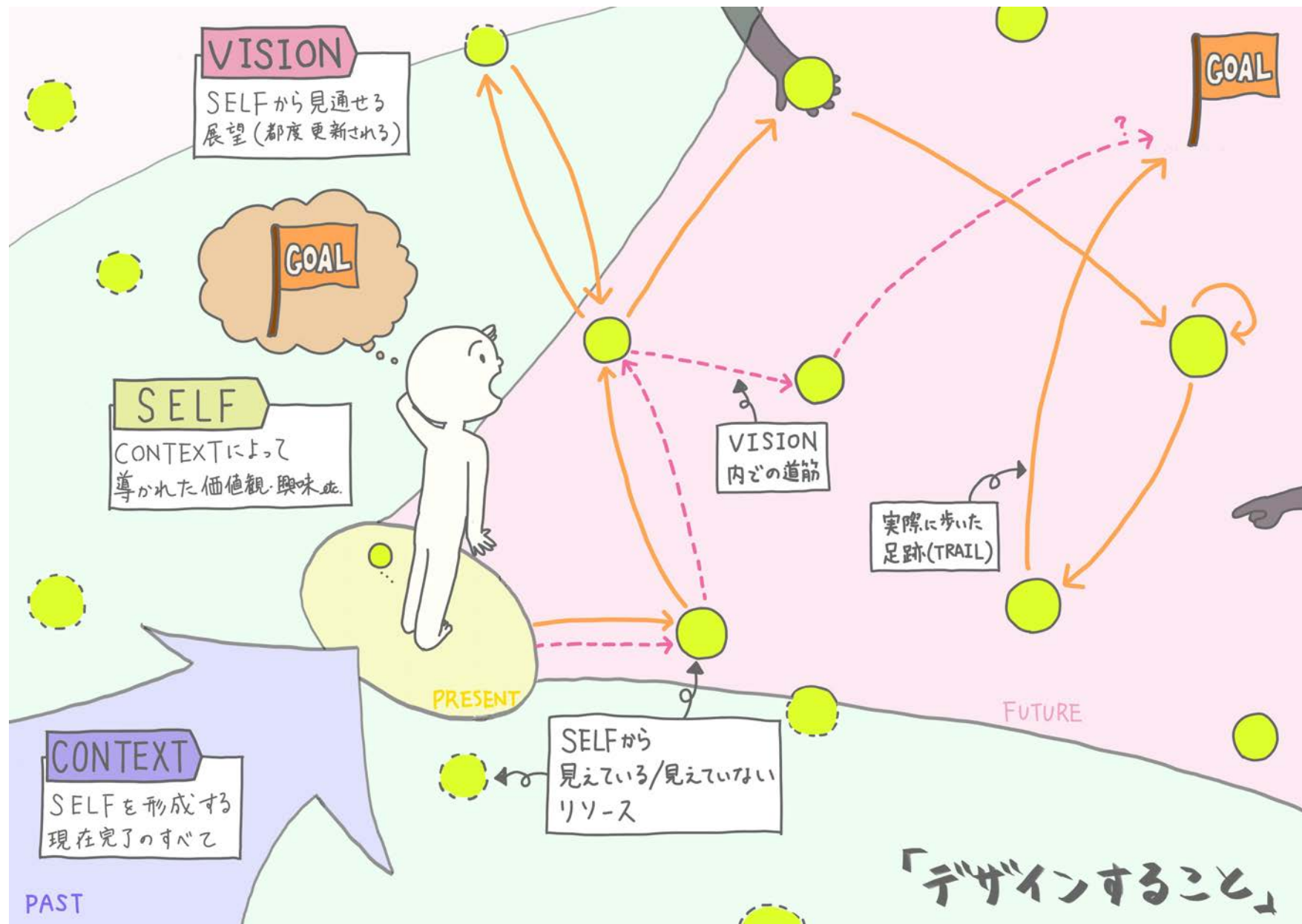
- 学び＝「行為」を手段として含みこむ目標自体への「参加」
- その目標に参加する子は、目標に迫るための手段をそれぞれに思考・選択し、必要に応じて習得する
- この文脈・過程で用いられる知識や解決方法
⇒概念的理解＝「学びの連続性」を生み出す

学校における「学び」とは何か―「行為」から「参加」へ―

「学びを自分でデザインする」とは・・・

学びが自分（たち）のものであると自覚し、
学びの目標、道筋、表現方法を思考し選択している

⇒それを保障するカリキュラムや学習環境の構想



「学びを自分でデザインする」カリキュラム
新しい領域設定

デザインの実践の場

Laboratory

学びの「ビジョン」に迫る道筋を
「自分」でデザイン

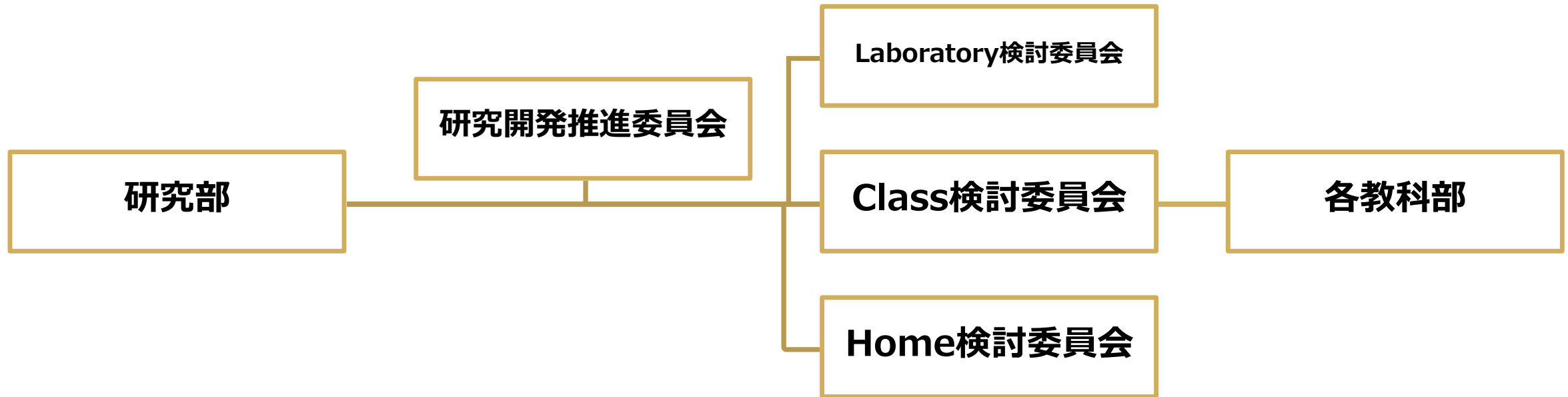
Home

「よりよく生きる」ことを
「みんな」でデザイン

Class

デザインの実践に向けて 文化・科学の学問的視座
⇒子どもの経験世界を広げ、「デザイン」につなげる

今年度の研究体制（3年次）



職 名（主たる役割）	氏 名	担当学年・担当教科 （主たる研究教科）
研究部長	○久保賢太郎	1 学年・全科（体育科）
研究推進委員長（理論構築・校内研運営）	木村 翔太	6 学年・全科（英語科・体育科）
研究推進委員・Laboratory検討委員長	栗田辰一朗	5 学年・全科（算数科）
研究推進委員（渉外・研究発表会）	大澤 俊介	3 学年・全科（理科）
研究推進委員（研究評価・書籍）	名 洸司	専 科・英語科（英語科）
Home検討委員長	清水 良	5 学年・全科（国語科）
Home検討委員・Class検討委員	齋藤 豊	専 科・音楽科（音楽科）
Home検討委員	松本 大介	6 学年・全科（社会科）
Home検討委員・Class検討委員	箱崎 由衣	3 学年・全科（道德科）
Home検討委員	今 里衣	栄養教諭・健康教育（食育）
Laboratory検討委員・Class検討委員	大島 静恵	5 学年・全科（国語科）
Laboratory検討委員	佐藤 文恵	1 学年・全科（体育科）
Laboratory検討委員・Class検討委員	武田 渉	専 科・図画工作科（図画工作科）
Laboratory検討委員・Class検討委員	庄司 佳世	2 学年・全科（体育科）
Laboratory検討委員・Class検討委員	鴻巣 敬	4 学年・全科（情報教育）
Laboratory検討委員	高橋麻里奈	4 学年・全科（理科）
Laboratory検討委員	桑野 桜	養護教諭・健康教育
Laboratory検討委員	金澤磨樹子	学校司書
Class検討委員長	河野 広和	2 学年・全科（理科）
Class検討委員	宮田 浩行	4 学年・全科（社会科）
Class検討委員	岸野 存宏	3 学年・全科（社会科）
Class検討委員	堀井 孝彦	専 科・理科（理科）
Class検討委員	沼田 晶弘	1 学年・全科（総合学習）
学習資料部長	梅田 翼	5 学年・全科（理科）
研究開発委員長	永山 香織	2 学年・全科（算数科）

運営指導委員一覧（今年度：3年次）

氏 名	所 属	職名	備考 (専門分野等)	担当
○松浦 執	東京学芸大学	教授	委員長理科教育	Laboratory
藤江 康彦	東京大学	教授	教育方法学	Home
上野 正道	上智大学	教授	教育哲学	Home
益川 弘如	聖心女子大学	教授	教育学・認知科学	Class
金子 嘉宏	東京学芸大学	教授	教育プログラム	Laboratory
狩野 賢司	東京学芸大学	教授	生命科学分野	全体
林 正太	東京学芸大学	特命教授	英語教育	Class
正木 賢一	東京学芸大学	准教授	美術分野	Laboratory
松本 至巨	東京学芸大学附属高校	教諭	研究主任（地理科）	Class
鈴木 誠	東京学芸大学附属世田谷中学校	教諭	研究主任（数学科）	Class

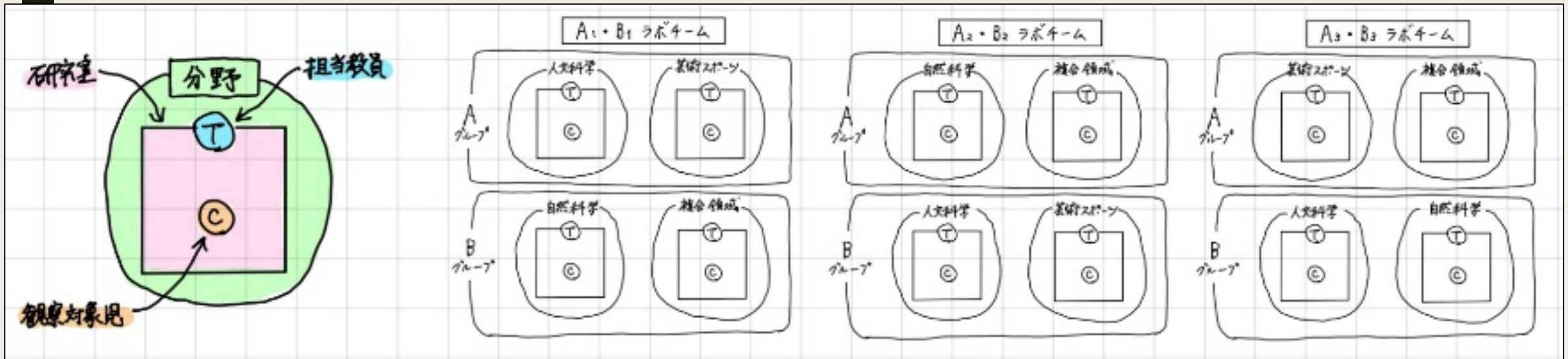
今年度の研究（3年次）

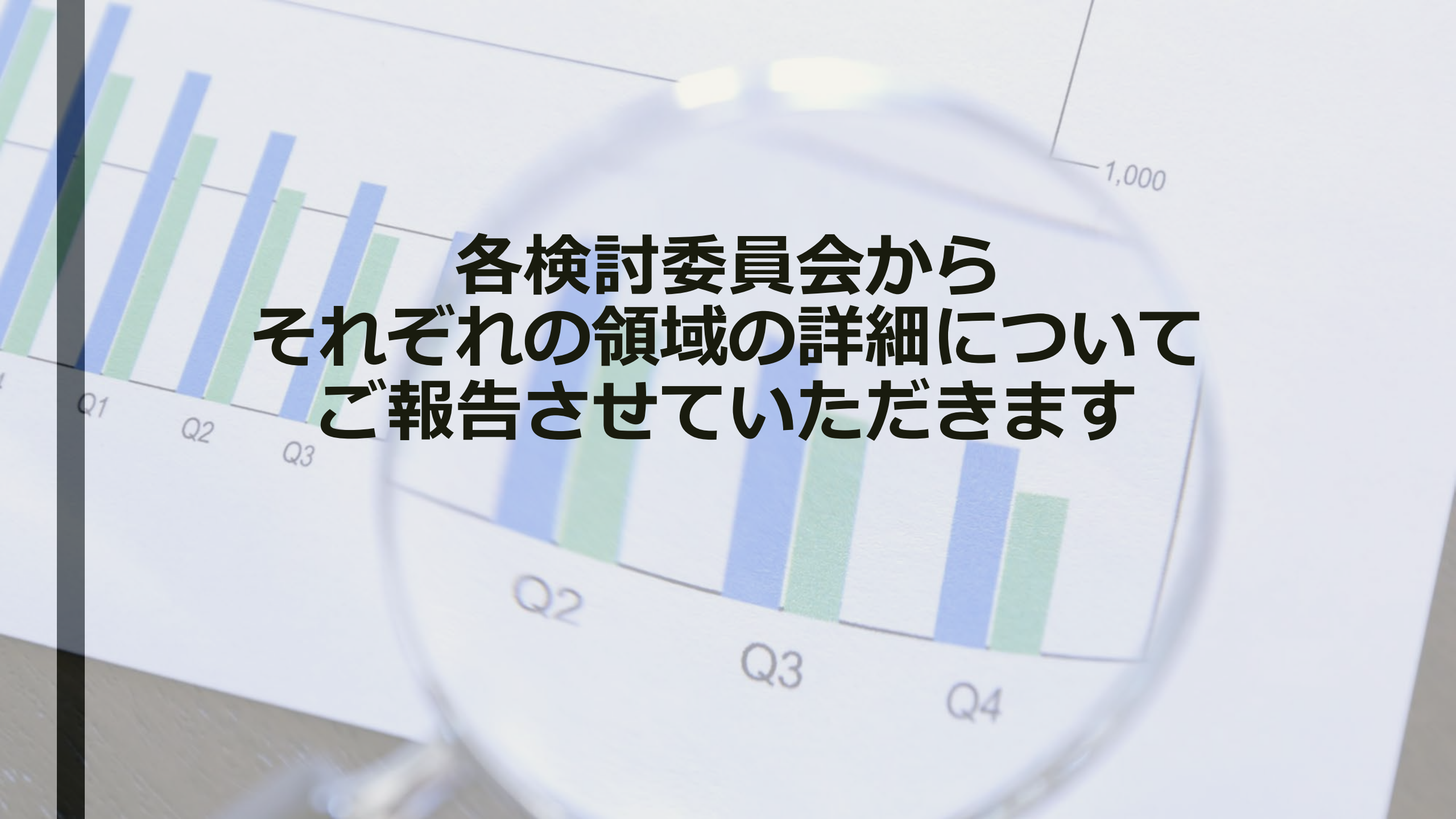
1. 先行実施となるLaboratoryにおける「学びを自分でデザインする」姿や学習環境デザインについて
2. Home実現に向けた理念や具体的な活動・解決すべき課題等の検討
3. 「デザイン」につながるClass（教科学習）の教科内容・評価方略等の検討

今年度の研究（3年次）～Laboratory～

具体的な校内研の方法 ～ $A_n \cdot B_n$ によるラボチーム～

- 1) 教員（3年担任も）が、2つのA, Bグループに分かれる。
- 2) Aグループ2名とBグループ2名で、合計4～6名のチームを組む。
- 3) そのチームで一年間、観察対象児のラボを見取り、研究し、発表する。



A magnifying glass is positioned over a bar chart. The chart has a light blue background with white grid lines. The x-axis is labeled with 'Q1', 'Q2', 'Q3', and 'Q4'. The y-axis has a label '1,000'. There are two data series: one represented by blue bars and another by green bars. The blue bars are consistently taller than the green bars. The magnifying glass is centered over the 'Q2' and 'Q3' bars, with its handle visible at the bottom left.

**各検討委員会から
それぞれの領域の詳細について
ご報告させていただきます**

次年度（４年次：新設３領域全面实施１年 目）の研究活動方針

Laboratory

「デザイン」の実現につながる学習環境と
評価の研究＝校内研究①

Home

具体的な活動・課題・教師の役割・
学習環境等についての検討＝校内研究②

Class

各教科カリキュラムの再検討・授業研究会の実施

次年度（４年次：新設３領域全面実施１年目） の研究活動方針

- LaboratoryとHomeで発揮される汎用的スキル・態度や価値観について
定量的調査及び統計的分析を行い再定義
- 定量的調査結果と子どもたちの具体的な事実を照らしあわせ、「デザイン」が保証される教育課程・学習環境になっているのかを検討
- 教育課程編成原理及びそれに基づいて生成された教育課程の再検討

これらの成果について、実際の子どもたちの活動の様子とともに
10月下旬に予定している研究発表会にてご提案させていただきます

学校研究提案は以上です。
ご清聴ありがとうございました。

主な引用参考文献

R.K.ソーヤー，大島純ら訳（2016）学習科学ハンドブック，北大路書房．

山口周（2019）ニュータイプの時代－新時代を生き抜く24の思考・行動様式－，ダイヤモンド社．